

令和3年度千葉県学校体育研究大会

1 大会主題 『主体的・対話的で深い学びの実現に向けた体育学習の推進』

2 開催方法 オンデマンド配信形式による開催（講演・各分科会展開授業）

3 会場

(1) 全体会 新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止
(講演のみオンデマンド配信)

(2) 分科会
 小学校 千葉市立蘇我小学校
 中学校 千葉市立打瀬中学校
 高等学校 千葉県立幕張総合高等学校
 (各展開授業をオンデマンド配信)

4 内容

(1) 講演（オンデマンド配信）

演 題 「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた体育授業の推進」に向けて

講 師 桐蔭横浜大学 スポーツ健康政策学部

教授 佐藤 豊 先生

(2) 展開授業（オンデマンド配信）

分科会	指 導 者	展 開	単 元 名
小学校	荒井 崇 教諭	1年3組	走・跳の運動遊び（走の運動遊び） ～ラン！ラン♪ランド（ロープ走）～
	萬 優里 教諭	2年3組	ゲーム（ボールゲーム） ～バウンドキャッチゲーム～
	佐々木 暁美 教諭	3年2組	走・跳の運動（小型ハードル走）
	鈴木 海成 教諭	4年3組	器械運動「マット運動」
	工藤 美郷 教諭	5年3組	ボール運動（ベースボール型） ティーボール
	大谷 理人 教諭	6年1組	器械運動「跳び箱運動」
中学校	小高 真奈 教諭	2年B組	球技 (ゴール型)「バスケットボール」
	鈴木 俊 教諭	3年A組	体づくり運動 (実生活に生かす運動の計画)
高等学校	秋葉 麻帆 教諭 荻野 浩明 教諭	2年女子個人 203講座	陸上競技「走り高跳び」

5 講演

演題 「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた体育学習の推進」に向けて

講師 桐蔭横浜大学 教授 佐藤 豊 先生

(1) 主体的・対話的で深い学びの授業の工夫

①主体的・対話的で深い学びの背景

- ・グローバル化、IT・AI化により新たな資質・能力の必要性が生じた。
- ・世界の教育の変化により21世紀型の能力の提案がされた。
- ・学習指導要領の改訂→教えたことによって「何ができるようになるか」、そのために「どのように学ぶのか」という視点を踏まえている。

②主体的・対話的で深い学びの実現に向けた視点（能動的な学習）

- ・自分事として学習したことを捉え、有用感や将来の活用可能性をイメージしながら、自分の考えを他者に伝えつつ学習への意欲を高めていく
- ・ICTの活用により、指導の個別化・学習の個性化、協働的な学びが可能となり、より一層自己の考えを広げたり深めたりできるようになっていく。

③深い学びの要件

- ・**系統的学習**（知識を確実に定着させる）と**経験的学習**（自分の興味関心に従って主体的に学ぶ）の配分をうまく組み合わせながら授業を作っていく。
- ・**具体**（何を、どのように）と**概念**（なぜ）を組み合わせる。
例）サッカーにおいていえば、パスやドリブルのポイントを学ぶこと（具体）、これらを学ぶことで何に役立つのか、どう意味があるのかを考えること（概念）により、攻防を楽しむサッカー（ゴール型）の特性に迫ることができるようになる。
→サッカーという教材を通してゴール型に汎用できる技能を学ばせることが大事。
- ・**指導スタイル**と**学習スタイル**の組み合わせを工夫する。
例）学びに向かう力（協力・共生）は教師と学習者の関係だけでは十分な育成ができないので協働的な学習を取り入れることによって指導の充実を図ることができる。
ペア学習やグループ学習、ジグソー型の学習などをうまく取り入れていくとよい。

④アクティブ・ラーニングの失敗事例（「活動あって学び無し」）の原因について

- （生徒側）・参加意識の低さ ・合意形成能力 ・認識・洞察力の低さ（安易な結論や思考が持続できない）
（教師側）・生徒との合意、説明不足 ・形式や成果にこだわる ・問いに対する待ち不足

(2) カリキュラム・マネジメントの充実

①カリキュラムマネジメントとは

- ・マネジメント：経営者だけでなく全員で取り組むことが大事である。
- ・3つの視点（目的や内容を教科横断的な視点、評価と改善、人的・物的な体制）
- ・縦と横の広がりを考える。
（縦の広がり）小学校であれば6年間の指導計画を1枚の紙にまとめることで、指導の重複や学習指導要領の内容を重点化できる。
（横の広がり）体育・保健体育で教えたことが他教科とどうつながっているのかをまとめると、学んだことを次にどこで生かせるのかという連続性を持たせることで最大の教育効果を図る。

②体育科・保健体育科の教育課程について

- ・12年間について4年ごとに3つのまとまりに分けている。
 - 小学校1年生～4年生 【各種の運動の基礎を培う時期】
 - 小学校5年生～中学校2年生 【多くの領域の学習を経験する時期】
 - 中学校3年生～高校3年生 【卒業後も運動やスポーツに多様な価値に関わることができるようにする時期】
- ・各領域について
 - 体づくり運動：心身の相関・高め方を学ぶ領域
 - 体育理論：運動やスポーツの価値や必要性を学ぶ領域
 - 保健：健康の重要性を学ぶ領域
 - そのほかの運動領域：結果として体力向上を図る領域
- ・豊かなスポーツライフの実現のためのカリキュラム・マネジメント
 - 例1) 水泳学習がなぜ小学校から高校まで授業で設定されているのか。
 - すべての児童生徒を競泳選手にするわけではなく、「安全確保につながる運動」として水泳学習を実施している。そのために効果的な体の使い方や浮き方などを身に付けていく。
 - 例2) 器械運動がなぜあるのか
 - 器械運動は日常生活で使うことはほとんどないが、普段やらない動きには身に付けるための動きのポイントやコツのつかみ方があり、それを学ぶことで違う領域を学ぶときに技能だけでなく汎用的な学び方の学習として有用である

(3) 学習指導要領の理解と学習評価

①学習指導要領解説について

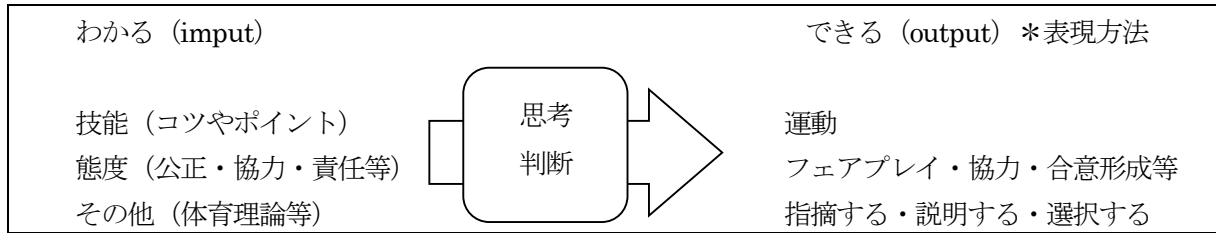
- ・学習指導要領解説には内容の解説として、体育・保健体育における知識・技能、思考力、判断力、表現力、学びに向かう力、人間性については具体的にどのような指導事項があるのか、何を教えるのかを示されている。
- ・知識については小学校の例示には記載されていないが、本体と解説に「行い方を理解する」という文言が書かれている。
 - 指導するときには「行い方について言ったり書いたりしている」という評価基準となる。
- ・楽しさや喜びを味わいながら技能を身に付けていく

楽しさ…体を動かす心地よさ 喜び…運動特性に触れる喜び

②カリキュラム・マネジメントの一環としての指導と評価

- ・PDCAサイクルを体育の授業に当てはめると
 - 1 学習指導要領や各種指導資料集で体系化を図る
 - 2 年間指導計画に基づいて単元を作成する。
 - 指導内容、学習過程、評価の機会が示されている指導と評価の計画の作成が重要
 - 3 学習評価
 - 4 指導の振り返り
 - 学習評価は児童生徒を序列化するためのものではなく、学習指導要領に示された内容に導くものであり、できていなければ指導と共にもう一度振り返る。

③体育の「わかる」と「できる」について



- ・知識としてインプットしたものを、思考判断の結果アウトプットされたものを評価する。
 - ・考えたけど表出できなければ思考力、判断力はAだけど知識及び技能はBとなる。
 - ・態度の表現については思考判断の結果表出されたものを、主体的に学ぶ態度として評価する。
- 体育に関しては、主体的に学ぶ態度も指導事項が書かれているので、それぞれ独立して評価する。
(他教科は知識、技能と思考力、判断力、表現力と連動する)

④知識及び技能について

- ・具体的知識と汎用的知識を関連させて理解できるようにすることと、知識を生かして技能を身に付けていくことが大切。

<p>【具体的知識】 具体的知識 (何を) 方法的知識 (どのように)</p> <p>【汎用的知識】 概念的知識 (なぜ) →深い学びにつなげるために必要、 他の場面でも生かせるようになる。</p>

⑤思考力、判断力、表現力等について

- ・小学校は思考・判断と表現に分かれている。例示を引用して評価基準を作成する
- ・思考力、判断力を育むためには概念→方法→具体の視点で考えるとよい。
 - ・ルール工夫 (何のために、どうやって、何を)
 →学年が上がるについて正規のルールに近付いていくのでバランスを考えていくことが重要
 - ・作戦を選ぶ
 例) サッカー (ゴール型)
 突破する (概念) →ドリブルを仕掛ける、パスをつなぐ (方法) →作戦を引き出させる (具体)
- ・体育では瞬時に判断 (リアルな判断) したことを伝えることができる。単元の終わりになぜそのように判断したのかを分析をする (じっくり判断) ことで汎用的能力になっていく。

⑥学びに向かう力、人間性等について

- ・体育は「学びに向かう力、人間性」の指導内容が明記されている。
 例) フェアプレイとは何かを教師が伝える→行動を観察し、良いプレーを称賛する
 →他者の行動から自らの動きを調整し、良いプレーを心がけていく。
- ・内面的価値と外面的価値
 (内面的価値) スポーツそのものが持っている楽しさ・価値→教材の持っている良さを味わわせる
 (外面的価値) 社会を守る規範的な態度、よりよい社会をつくらうとする態度

⑦ユニバーサルデザインの授業づくり

- ・どこにつまずきがあるのかを 特徴と手立てが記載されている。

⑧よい授業の二重構造

- ・内容的条件と基礎的条件

⑨指導内容のカリキュラム・マネジメント

- ・ 2年ごとに指導内容が示されている。
→ 2年間のまとまりで指導内容を重点化する。
- ・ 中学校3年生は高校での実施内容を見越して作成する。
- ・ 評価計画については、取りこぼさないために記しているのに、評価機会時にBでも単元の後半になってAに変わることも考えられる。(総括的評価が評定につながる評価になっていく。)
- ・ 単元全体で診断的評価→形成的評価→総括的評価を行う。